

理科という教科の変遷

明治5年に学制が制定され、日本の公教育が始まった。

学校教育は、従来の人たちの時間の使い方と教育方法とが根本的に異なることと、労働力確保のために学校教育制度はなかなか受け入れられなかった。しかし、明治5年当時、下等小学校4年、上等小学校4年であったようだ。

この後、維新後の西欧に迫いつくための知識偏重の教育から日本古来の徳育、民衆による教育等様々な考えのもと、学制が変更され続けていく。ここでは詳細には触れないが、いつ頃、どのような理科の内容が教授されたかを記す。

○明治6年（下等小学校教則）

4年目で、「問答」という教科において、人体の部分、諸物の性質を学習する。

○明治14年（改正教育令による小学校教則綱領） ※3年間義務

小学校初等科（3年）なし

小学校中等科（3年）博物、物理

小学校高等科（3年）化学、生理学

○明治19年（小学校令に基づく小学校の学科及其程度） ※8年間義務とする（実質4年）

尋常小学校（4年）なし

高等小学校（4年）理科（理科に統合）

○明治23年（小学校令改正に基づく小学校教則の大綱） ※義務教育は尋常小学校の3年又は4年

尋常小学校（4年）なし

高等小学校（4年）理科 ※2年、3年、又は4年

○明治33年（小学校令改正に基づく小学令施行規則） ※義務教育は尋常小学校の4年

尋常小学校（4年）なし

高等小学校（4年）理科 ※尋常小学校に高等科2年併設も可

○明治40年（義務教育6年に延長）

尋常小学校（6年）理科（5年生と6年生に理科）

高等小学校（2年）理科

高等小学校の就学は、家庭の都合を考慮して、義務から外していたし、義務教育の尋常小学校の就業率も100%ではなかった。

さて、気がついたと思うが、制度上義務教育で国民が理科という教科を学校教育として学ぶのは、明治40年になってからである。学制が始まってから何と35年もたつてのことである。それも週2単位時間の2年間である。

明治40年といえば、第一次世界大戦後、日本が国際社会へ進出し、列強と対応以上に張り合っていく時代である。その手段としての教育に理科が盛り込まれたことになる。

それに比べると現在は、小学校3年生から中学校3年まで、週3単位時間以上を7年間学んでいる。

理科の目的も時代により変わっているが、現在は、科学や産業の進歩として存在するが、環境、発展、生存、共存のための理科教育でもある。自然や社会に対して有用性があり、問題解決のトレーニングの場として、だれもが学べる理科を大切にしていきたい。

【参考文献】「学制100年史」 文部省